

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20274

研究課題名（和文）公立中学生の英語発表能力を育成する：検定教科書準拠型指導プログラムの考案と検証

研究課題名（英文）Fostering English Presentation Skills for Public Junior High School Students:
Designing and Evaluating a Curriculum Aligned with Standardized Textbooks

研究代表者

肥田 和樹 (Hida, Kazuki)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：20906698

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の結果、公立中学教員は特に英語発表指導などのパフォーマンス評価について非常に難しいと感じていることがわかり、改めてルーブリックを活用した発表指導手順および評価手順の必要性が示唆された。また、大学生同士の協働学習が英語発表能力の向上に貢献していることが示唆された。具体的には、学生はテキストや教員のレクチャーからだけでなく、グループメンバーとの対話から問題解決の糸口を見出していることがわかった。さらに、協働学習での学びを自分自身の知識へ転換させ、プレゼンテーションスキルの向上へ繋げようとする意識が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学習指導要領の改定に伴い「話すこと」が[やりとり][発表]の二領域に細分化され、発表指導の重要性がさらに高まっている。しかしながら、中学校では主にやりとり指導が行われており、発表指導は指導時間数も不十分であり、かつ単発的に実施されていることが多く、継続した指導は充分に行われていない。こうした背景を踏まえ、公立中学教員が効果的で継続した発表指導を実施するために必要な支援を調査し、指導効果・実用性が複数の公立中学で実証される一貫したプログラムを考案・検証することは、非常に重要な課題である。

研究成果の概要（英文）：Results of this study revealed that public junior high school teachers find performance evaluation, particularly in English presentation instruction, to be challenging. As a result, it is suggested that it is necessary to utilize rubrics as a means of guiding presentation instruction and assessment procedures. Furthermore, the study suggested that collaborative learning among university students contributes to the improvement of English presentation skills. Specifically, it was observed that students not only derived problem-solving insights from textbooks and teacher lectures but also from dialogues with their group members. They were able to convert their collaborative learning experiences into personal knowledge and demonstrated a conscious effort to apply this knowledge towards enhancing their presentation skills.

研究分野：外国語教育（特に中学校英語教育）、プレゼンテーション指導、インタラクション研究、協働学習

キーワード：中学校英語教育 プレゼンテーション研究 インタラクション研究 協働学習

1. 研究開始当初の背景

学習指導要領の改定に伴い「話すこと」が[やりとり][発表]の二領域に細分化され、発表指導の重要性がさらに高まっていた。しかしながら、中学では主にやりとり指導が行われており、発表指導は指導時間数も不十分であり、かつ単発的に実施されていることが多く、継続した指導は充分に行われていなかった。理由の一つとして、事前指導・発表活動・発表評価・事後指導を含めた、中学で実施可能な発表指導プログラムが確立されていないことが挙げられた。中学教員が十分な発表指導を継続して実施できていない現状や理由を調査し、発表指導プログラムを考案する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は公立中学教員が効果的で継続した発表指導を実施するために必要な支援を調査し、指導効果・実用性が複数の公立中学で実証される一貫したプログラムを考案・検証することを目的とするものである。本研究では 1) 中学教員が十分な発表指導を継続して実施できていない現状や理由を、紙面調査と授業観察により明らかにし、2) 事前指導・発表活動・発表評価・事後指導の四つのステップを含めた、一貫した発表指導プログラムを検定済み教科書に準拠した形で考案し、3) 指導効果と実用性を一学期間の実験授業により検証することを目標とした。

一方で新型コロナウイルス拡大を受け、当初予定していた、公立中学での実験授業の実施が困難となったため、研究代表者が所属する大学において事前指導としての発表指導における協働学習実施手順の考案・検証を行うことを目標とした。

3. 研究の方法

初年度(令和3年度)は、公立中学校での授業観察を11校実施し、そのうち数名の授業担当教員による授業報告会に同席し、教員の指導に対する意識について調査した。授業観察に加え、国内外の発表指導研究をまとめた基礎研究を行なった(Hida, 2022)。そして事前指導としての発表指導における協働学習実施手順を考案し、大学において秋学期間15回の予備の実験授業を実施した。具体的には、強調方法や内容の構成などの発表スキルに関する学習者同士の対話を録音・文字起こし、テーマ分析を行なった。さらに学生に各授業後、学期末に授業の振り返りを提出させ、テーマ分析を行なった。2年目には前年度に実施した予備の実験授業の実施内容・実施方法について検討し、協働学習実施手順の改善をおこない、本実験授業を実施した。昨年度に加え、発表活動の録画を行い、授業開始前・後におけるパフォーマンスの比較を行った。

4. 研究成果

本研究の結果

1) 研究結果概要:

本研究の結果、公立中学教員は特に英語発表指導などのパフォーマンス評価について非常に難しいと感じていることがわかり、改めてルーブリックを活用した発表指導手順および評価手順の必要性を強く感じた。また、大学生同士の協働学習が英語発表能力の向上に貢献していることが示唆された。具体的には、学生はテキストや教員のレクチャーからだけでなく、グループメンバーとの対話から問題解決の糸口を見出していることがわかった。さらに、協働学習での学びを自分自身の知識へ転換させ、プレゼンテーションスキルの向上へ繋げようとする意識が見られた。

「知識・スキルの学び」と「不安の軽減」に効果あり

学生による学期末振り返りレポートにおいて「協働学習において何が改善されたか」という問いへの答えに対しテーマ分析を行なった結果、英語発表指導における協働学習は5つのテーマにおいて効果的であることが示唆された: 1) 発表者の意図と聴衆の意識とのギャップへの気づき 2) 知識の協働構築 3) 苦手の克服 4) 他者の発表からの学び 5) 緊張の緩和と自信の獲得。以上のように、他者と協働学習は、自分にはない知識やスキルを実際に目の当たりにする機会となり、自分だけでは気づけない点にも気づく機会となり、発表指導においても一定の効果があることが示唆された。

自身の発表パフォーマンスを改善できた

学生による学期末振り返りレポートにおいて「自身のパフォーマンスをどのように改善したか」

という問いへの答えに対しテーマ分析を行なった結果、4つのテーマが抽出された：1)言語スキル・非言語スキルの練習 2)発表スライド、原稿の改善・準備 3)発表時の意識の改善 4)教員・クラスメイトからの改善案の採用。以上のように、学習者が協働学習において得た知識やスキル、そして他者からの意見を取り入れ、自己のパフォーマンスの改善につなげようとしていることがわかった。

2) 今後の展望

今後の展望として、現在分析中である授業開始前後における発表パフォーマンスと学習者の学びの過程との関連を調査していきたい。これまでの発表指導研究では、さまざまな指導手順や指導環境が学習者の発表パフォーマンスにどのような影響を与えるかについて多くの関心が寄せられてきた。しかし、学習者がどのように発表スキルや知識を学んでいくのか、学びの過程についてわかっていないことが多い。そこで学習者の学びの過程を明らかにするとともに、実際の発表パフォーマンスがどのように変化したのか分析し、最終的に学習過程と発表パフォーマンスの関連を明らかにすることで、より効果的な英語発表指導手順の考案を行いたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kazuki Hida	4. 巻 70
2. 論文標題 A Cognitive Approach to Oral Presentation Teaching in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学術研究：人文科学・社会科学編	6. 最初と最後の頁 181 - 190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Kazuki Hida
2. 発表標題 Collaborative Learning for Oral Presentation Skills: A Case of Japanese English Learners
3. 学会等名 CLaSIC 2022（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuki Hida
2. 発表標題 Japanese EFL learners' strategy use for improving English oral presentation
3. 学会等名 SSU4 Situating Strategy Use: Strategic Learning in an Uncertain World（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

COLLABORATIVE LEARNING FOR ORAL PRESENTATION SKILLS: A CASE OF JAPANESE ENGLISH LEARNERS
Kazuki Hida
Foreign Language Education in the 21st Century: Review, Re-conceptualise and Re-align 36-44 2022年12月

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------